誹諧

# 其角七部集 下

911.3
キ
下

誹諧錦繍緞巻下

誹人を伴ひて　木曽の月見は

俤や姨ひとり泣月の友　翁

いさよひもまた更科の郡の郷

此ふたつは翁の句なれと　ゆかしくて

書たゝみて桟も目も寒かれず　在紙人

夜色山

銀漢や松の色へ落かゝる　其角

馬の背に揺られて見さむし星の光　珍夕

貳冊之内

陸風庵柳出求之

戀

扇折にまつうき化粧かな　尚白

鉛さらし露盤にかゝる白りかな　山川

星合や座敷に入の砧の音　氷花
このつきの君き間ふて

早乙女手足洗ふるう紐さよ　其角

娟かくしけりうすき帷子や　雨等

一廻り待人留主は杉やりかな　尚白

起き掃の姿粧白し嫁(ヨメ)か顔　行舟

出代やよ所さの兩も仏かへりやまん

妹(ツマ)見舞くいふ見ぬし粽(チマキ)五把　嵐雪



男試秘よ命あるうちあれ代ハ女房衣　秋之

交りは紫薇のさゝ紅くる小梅かな、

茄子のし六條との北牡丹か花　近江 許六

春乃野や木丸ハ遊の出合せ　治徳

伏見西蓮ち魚かね

初雪や人見のおもふかし見舟　其角

寒山の讃

寐る恩に門乃雪なく乞食哉ヽ

誹おろ花がまことに翁のかとり

中さりはまかりけれえ

笘ろくまゐてもかんぜん誹和　去来

ゆく〳〵よめりくれて

長嘯の墓もめぐるか鉢たゝき　翁

こゝろなき瓢簞ならせよ鉢敲　去来

世の中はされよかなし鉢たゝき　尚白

あとしきを旅人いなし鉢叩　其角

翁に伴て高野に詣けるは

数珠手に行あき孤なり杉の院　杜国

あくる日すニ十迄そ夜半の秋　八橋

古足袋の四十に足を踏込ぬ　嵐雪

呼つ衾(フスマ)夜は酒債(カケカイ)とし覗ひけり　竪田　千那

火桶抱て抱とひ膝(ヒザ)をかゝへける　洛　亜



その〳〵夜半に汲るさびしや小盃　其角

菊の風つゝ洗ふけ酒の泡　嵐雪

あるは旅の山さちける人のいまよ
むかしさへ旅はに思はれて緋たし
中々に世にて獨吟の奥にかしな

下部には花みぬ家やはやけてり　巴風

犬もとくてゐる一日の友　其角

椿遠る小屋かまくへの花やまて　ゝ

蕣氏あわたく出る垣根の紀　風

蒿きみゆの帷あゆくる月の色　ゝ

鼻のうてま紙亦秋なぬ　角
小坊主は名紙書きれいてあるまず
文字なりつめて紙子よりも
峰さ様の御へ茶飯一足もとひける
何紙目ゆくる時てわれ禅
ちときみに喧嘩をきるも海しさる
杜拝まかくもて重き身をさる
裏へ色閻寺詣りに年なれや
安養界紙鼾かくし御
板の後をれ下の蓆し御手
蛸を突くもて姑ゆのせさ



泣なきよ幸ゆゑ思くやみかりし
月花秀る白黒の胡麻
吹きくは一滴と細り秋の風
ものゝ香に皮筆入の佳
瀬中米とものゆる落花の露
又らく砕けて孫あたりて露
物ふき候点もち候へて斤つゝ
謎話せる今の由ら人
糠をほ嫁の常紙尽きけり
うつ生き香せもる袖れ蛇
恵心僧法のちらし紙はれ手き哉

たゞかゝる風あかりかゝやくとも
こゝろは越の白山やま哉
ものゝはさかり雪ふるの春

十二月廿日即興

おもはくも立入探梅の花　芭蕉
降こむ中に馬はつる宿　彫棠
目手もぬつまる者をかゞへて　其角
松歳のよはひ衣紬たて　黄山
夕月はなやけくかんな眉　桃隣
出代りもつく秋をもりし哉　銀杏



隣なるきぬのひゞける槌の音　棠
肩にかけなからかき籠の秋　角
足もとに菜種を踏て芥乃花　杏
茶の煮て出るを泊る僧の学寮　蕉
下張の反故みることのまゝならして　山
はれかつく猫の身をかろめ来　隣
むかしや襟に酒込み嫁皇　棠
硯洗ふを立やその頃　角
菊時雨窓にぬれてちくさすさん　蕉
云すの折は恋てむ唇　隣
まなこ開と髭をかく髪を結有　角

誰にもきくと小声でさゝる癡　棠
愚なる和尚も友達秋乃暮　杏
かゝみ寺の錢揚る箱戸棚　山
山鳥の口ひらくこゝろは志川らく　蕉
秋の夜かゝるこの合歓の下闇　角
かけむかひ機へる家のいとまなし　山
思はぬ雨に昼寝次第　杏
氣色まで曹洞宗の身かゝり手　麟
焦はこのみはいさくさを焼　棠
見ぬ人に主人くま盛志つれは　角
すゝき水ふる沢かしかさ　蕉



珍しき星は晴けて夜る此月　棠
わかれてしめ此宿臥ゆる庵　山
松茸は近江路かへは沢山手　角
こゝろひるまき下くま宿　杏
勢すゝは御膳わかれまかしてる里　蕉
花の名は知しほこり揚貴妃　棠
付けは宿中でたちかく振乃色　山
こてふの新者躾くゝ線　麟

八月十八日雨中唫

川つゝ揖て身此夜寒のかな　仙化
月をみるへくさ志かとて山雨　其角

鍬ぶくる花も子ら乳をもらひける
むじんそのこす棟上の槌
初雪代師是は放く隠せしや
隠しれ年の中にし糸物
人かしを名にみく稀も乳付親
師すり日ころの七夜信心
お稲をさるかく降のうしみえ
こゝろりて邑の庵乃立竹
新の雛をづまく飛あのわ
渋柿つくり柿乃前これ
娘のくまた王子へいそく五香まい

普船 化 角 船 化 角 船 化



氷田咲すり出す兄弟
月はふる利休屋誹諧師の服の哉
雨芹も色ある裏門の苺
いぶけみる麦飯くひけり初茄子
邂逅山さへ膚くわうこそ
草枕衛坊の名は去てしまふ
今の恩はとまふ盗人
こぬしやどの孫ろすれく絵白紙
あまりわ柳かひけり酒だかわ吐
消る尤の三線むくも我が如く
いくらわ彭代はかす愁き

普船 化 角 船 化 角 船

園の菊さへ嫗次のせくかに戯冊
子ハ杖ならなる老の小袖
詣もる稲万部の経に入らひ
あつさよりさまる松風
名月の竹紙窓むる村しら兎
かのかもえぜも大汲の酎
貫なりし鉄秋浅みし蛎のから
萱ヶ姉もまた垂く旋縦
驕にもちつき紙猫ハきぬくりけり
こさしずの燃年のさあぬ翁
初かしやかしや氷る広の雪

化　角　舩　化　角　舩　化　角



柳よ売るる疏ゆるひの垣
一葉出而一葉巴故ニ為芭ト
一葉巴而一葉焦故ニ為蕉ト
やまさても寄せ紫殺のきくぐ紙式
木槿の外も垣のあり菜
鉢の象数ハ月よ用ゆらん
甚みえりちるく一炷の箱
冬ちる糸絹上下の仕合しさ
番みちるわたる柱宮まる
袮嗚我ちしきる年さ押ねしく
紬稲の枝くるまゆかみ髪

舩　遠水　岩翁　其角　水　翁　角　斗　翁

痳病の是何に効(カウイ)なくさくら漬　角
揚屋ちりゝに屏風からびたる　水
さゝくに剥て尺の栗蠶(クリケムシ)　翁
おかげ入にする四五文の菊　角
月影手枝なき鳥がかゝむえ　水
あれはの草鞋(ゲ)をすげて垂藤　翁
出とりの大服にも犬ならじ　角
またあして雲にふれざる指(ユビ)語　水
打さんに花植ならぶ奥の庵　翁
嵐の花をみさぐ流ぞくる　角
世のなかに寺に男も出代りて　水



歎ならゝは百姓としよふ　翁
おろかなる詞に嫁が盆を返しける　角
ゐるゐをまて芝肥る原　水
蕨(ワラビ)まきて石清水へ滑(キメ)を揉ぬる　翁
て読ぶも耻もしらぬ雪路　角
志ある恋はつかれて肝(キモ)いらん　水
襟さらむもくまなしもやる　翁
秋まくと年玉扇のはれく　角
いく春人のたのむる医者かな　水
朧船ゐ身に座頭を送りける　翁
茶合柳をたてもる　宗論　角

新鑑旌ゆらぐなみの風　水
山葱ひとくもれ日の影　為
山ぐら川蕪の折菜をかき流し　角
煤はく女追おとる　彰　あ
犬箱をさけしき床の物あれや　翁
楊枝をはしてわりはけ文　角

甲戌紀行
箱根峠にて
杉の上に馬ぞみゆる山の穐　其角
秋の雲尾上の杉をはなれけり

いかなれば花もかはらぬ色し
三嶋旅中佳節
門酒やこゝろ此ゆよの菊を折
原回頭
影富や雲飛ぶ夕の富士の嵐
うつの山
うち折や馬も餅くふうはの山
小夜中山
在経たりおそらくは小夜の嵐
秋葉
合羽ぬぐ廉ありや秋の花

かしまに杖を残し玉林弐

三股川

おッ櫂に艪のまはり潮の色
十三夜深松かく
いつまでも古へを語るに
浪の月松やさかし　江戸の庭

熱田奉幣

芭蕉翁甲子の詣りには
社大に破れ築地はくづれ
草しげりかくろうに縄を
はりて小社の跡を志るし

石をすへてその神と
名のるよりほかのしるしなけれ
ばよもぎしげるも月出ぬれ
もかくわかくしかれなきり
興廃時あり甲戌の今年
造営ありてまみえかくし
宮しく　小社宮の軒（イラカ）や杉の月
　雨はれて
むかしき祭主の奏を送りけり

内宮

渡会氏奉まつりて

あからみてちらちらする五十鈴

川よりも遠く掬す

身乃秋や赤子もまゐる神路山

御神楽　謹上再拝

老いや小刻かしへて菜の春

二見　鈴慈

岩の上は神風ふきし浜さゝ

子はまゐて鈴魚の船とのへる外

宮川の上に酒送り　せしかるよ

跡に花を青よめてとゆかけまい

童名は花なき時の此翁いか



何ぞとかいふ心ある人出する

田丸越して

山畑の芋かるあとは外格の如

川に舟ありしや落ちかかるの

莫嗔野店無肴核薄酒

堪沽豆莢肥たりと周南家の

句を感じ

呈あらる辞にまけば新酒式

稲湘

枝みする石鏡代子逢ひておへつせよ

大和錦とそまとわれそかす

ちり也亦千柿のちりや我画になり

三輪

むかし人は三輪の近くにありけり
僧口キのしろすむかしに落るの
春日野の翁人を我舞に
ともあへて我の對を取り
やり侍るし

今我日秋の夜法我かすの山
二月堂に七日断食の紀名
持参僧凡引込て無二人声
日の月みぬ帝比て何松式

堂于ち興読にとむわて
小菊し山札人の遊ひ子仮る山がる
南院に是宝什物をよし有
中にも小松殿法然上人へ
まゐらせ拜し松陰の硯互
箱のうつ于ある歸りて書き
欲ると盆の硯の形ゟ
ゐつ見て作るゆへゆるへし
松陰氏硯に息残しんえての那
よし此山あり吹
向此寒に重り桃る也　若我

塀くゞる山鐘は霞か所々なり
ちりさく西は木を伐る寺
隷すひく境しおうしの色
心は麿はこゝろ寒雲緒石と
いふ句を思ひよせらく
高取の城は寒さよなりける山

世尊寺

ちのひされすふく風よみ寒れ
さう森よのよ月おいなれし
独もひせぞ達
龍田の月見所や九月尽

那河の滝かく
三尺の月は凡にかくる時雨哉
髙取山
卯塔は小春心は小春も秋の月
紀の川いく露もあり
三ヶ月は村の夜ノ秋
紀川ヶ弓矢取つく船やみの花
武津嶋年まゐりく
御所もあはよ中あはなりわの和浦
帰望
和歌の浦は見て月の秋なる夜の家

かけのあうしに出されし大畑
川一里奥が跡のあたの縫さまし
てらまはりつきてちかしく涼そ
ともみあるけり
鮒(フナ)ふる川と合はせる網引代
住吉奉納
芦乃葉銭もとも流れなやかの彼
十月十一日芭蕉翁終焉ナ
医者のくし答へけりしゆふべさよ
まねく彼旅歩まんと日まつる
世人所好学は止

州彦氏蕉子俳ノ座五
これは秋風とえさりけり
星合の影やいを織の先戦さ
節(フシ)し紋(アヤ)よ御屋の初月
十二三あらそふ雁の数々て
起(オキ)ては倒るゝ下戸の酒の音
川沖や舟をむぬ白く風音吉
あちらこち魚の漁する家
蛇の抱ゆる縁しけりあさく八重藤
けふ一しつ秋なる我猫の墓
中々に弁(コト)絵事せんまたれ 酒

普船
其角
李下
船
角
下
船
角
下

花も実もミもミテ樽より
新宮の松風音しるさのみとも堂
に都しきとも子縁拾ふさ
雨ふる日に化粧ひ出する 蔦被
猟ござしくも松ゆかに 掛
納と来て以ても酒屋面白し
山し 携ても良き深 雪
譜めて月みて露ぬれ物すれ物語
胸の物すむ甚力 僧正
家雲や紅赤ほの 大佛
宍井の濁を覗く 菰蕈菜

舩 角 下 舩 角 下 舩 角 下 舩 角

見かくして娘と肩すり着てゆり
聲えは賞ましてつらし来て 文
一仏助ける東ふるさと母に日のしみ光
船輪まで泥にくろめてはぎよろしと川
浦風まで漕ぎよむ 拍檀の交木立
座禅の影ひとうつし縮
俳諧南無と称へ雑き世は
是誠に酔るる浅草の市
と語しさい唯秋に月落も
何ゆへも只今身ゆへ献立
法達のくらき丘山伏しゆる道

下 舩 角 下 舩 角 下 舩 角 下 舩

まめやかにしく茶めを洗ひます　角
家の紋縁の調度は配りして　下
さし思ひしよ陰き鄙かな　舩
年寄にはわらさかん母け見むの後　角
片枝まはらにしまろくゑ蔵　下
六月晦日の桃かく
誂蘭亭の名にさし
とひかりし一夜吟
桐林まや古肉氏中も今歳日　彫棠
若檜紋なり扨布の夕立　其角
入川も座ふぬるれ棹さして　、

楼越ねみ君の あかりも夜　棠
照月に灯ささで出かけのし　、
後ろも泥さぬうゝねの秋　角
投かれて縁よりくちる出かな　、
目張とるゝる二階のふせぎ　棠
あなかしこ米は飯に入りさま出けり　角
つれつれ御ゆ遠き指も切りのけ　棠
堀に奈を菜もしひよりの落　角
立まく形りよきさ幣の飛風　棠
叢返の影来とかし洒の酎　角
四万の桃さんまりけ上る山　棠

崔のくぬ青紙より出る窓の月　棠
蘭手つきさる嵐なくし紀　角
ちろうとは親なかさりし世の時　棠
儚も法もむる温飾今も拜　角
小侍おは又建立のまちまぬ菴　丶
連ぶお訴の定めわし主　棠
杖竹も光るけうまゝ突ゐ付　角
石切つゝてて門の雨落　棠
ふおらし奥もあかりや清見寺　角
半子絵まつ見たる松の拙さ　棠
粧(カザ)られし身代売るゝ人の風　角



揚屋をかへてまさるゆめつき　棠
新しい草履にかゝれる鳥の客　角
狐乃風呂に入りて老月　棠
加茂川は公家の流をも凡旅　角
誰か見るやま小草外の道　棠
縁とれどおさまる石北秘あはし　丶
尼(アマ)公とは寺堂のくゝりき念仏　角
着もまつりの声も地中の所　棠
敬やうく移りにあるゝは花盛　丶
必ズ移りなみとわ帰　角
丶

三子草菴にとられける日

押まはしめ雨は樫とかりもなく　徹月

雨の脚日半ちかりや葛飾ゟ　素イ

手桶の蓋に一枚の荷(ハス)　紫紅

寂椿(イサハヤ)は八重の木槿をうつろひく　其角

秋とかしめる京辰部の色　彳

籾摺も早乙女かりし月の庭　月

欅(ソハヘ)の下の落る霧の秋　角

此露を拾ふる後の拾ふ路よ　紅

焼山越へは看をし白雲

下菴の菜はけしく瀬(テ)のくま　月

押さへる露乃ある秋　彳

一此も揚屋乃綺はあまりて　和

脱言とくさ紙をくひさく　角

中橋といひしお花路の森　彳

雪の句ひや茶まきつる酒　月

秋此花も柿よつまてんを踏　角

時(シャ)の目くまや盃の月　和

鯉跳る籞(イケス)の坂より柳　彳

芝生まもられ小坊主の影　月

春雨や海の暮れゆくも　和

下着をかへする百夜の腕(カラ)　角

半切の身共もさを飛くよむ　月
若やしく醒（サメ）て語るゝ面（ツラ）　千
浮あしくと追従者の無かりき　和
一向宗の南无阿弥陀仏　角
借素袍家よ押しらぬ姿千て　千
諸役御免の標浮く門　月
切飛脚と時よ歩ゆるかしま寺　角
振分の絲には書夢花流　和
十八ヶ寺申よ参詣ふくもありか　月
木曽木つゝゆる月の川声　千
百姓の流くとのゑ叙としの秋　角



お行脚来の人の世井中　和
雨とがしまてそ宿のあきく
再とそとうつり寺廿二年行て　匠庭
觜数ふ卯野とてゆる鶏のけ氣　閣指
散りしくて花て来て灯籠　其角
系にをもてよ勧て来そかうらん　山蜂
蝶の中く来氣碎く押要　指
蕣それ月既の額はもかり　角
御供井とをかよ汲てせ寺　蜂
川の気紙に刻まてく悲し佐渡の山　指

河ら玉れ音の豆ゟ叶由る　角
日乃さゐ蝿の入来る夜哉　蟷
秋れ言も今ちたてまさる数　指
りめ氏うめよう中水のしき　角
碁会の猪を中付て出　蟷
一節(トフシ)ハかかる高人の声わらじ　指
つりてる北下户や雪れあの月　角
面瘡(ヲモクカ)乃秋まもあまいうし能しき　蟷
ちゃきの刀帯てぞぬる　指
濱縺の目ハ雨ゆきる花の庭　角
費ある日なわさはれ出　蟷

ましらい無ひま留ぬるのれん　指
めぐるを待し半弁の門　蟷
若竹は乞食の中よまゐれ　角
小鯵は砂ミ計る去時　指
送りまでくれゐの尺ゟ下涼ミ　蟷
四月(ヨツキ)の腋といそめつまれさ　角
燵掃やかましハ神れる　指
小屏風く引る指の鑿口　蟷
町ぶく踏ミけく踊る　角
鑿切しきゐ月白乃雲　指
梨葡萄(ブダウ)らの色く郎れ水さるゟ　蟷

扇の下へよける蛞く蜒　角

ちりてやかしこにちられし虫の骨　指

脩蚕のつまる白山の温泉　蜂

ちり川がある猪の斯のまゝはしくて　角

脱ぐ尾斗あめの蕊の松明　指

大枝を花盛人も切りけり　嗒

萬なりかしまりて落る鶯の声　角

渋葉に來りあつらひて

晴るゝ迄く高紙みえ吊

ゆふぐれや螢ちの舟乃まろ　其角

松の外とめげゝ旁し身　紫雫

荷の殿に訶るわつて負ふ手間　我

二つある絡ゝそゝぬる　角

蚤の跡あり刀の綱月出宿　栗

蒸せうきによる藤の霧く　我

けふの菊まかりかる姫の子　角

包ゝをとゝけい饅頭の餡　栗

咽よつまてく狐佛るの紙気清し　我

和田恩知ゐるが知りちわらん　角

炭賣の汚るる釼を鍛して　栗

毛なかりる本て流のつる雑　我

さ新も竈西百の葉業八つまなし　角

おもしろくなりゐる茶の出居
薬の煎ちらきさらく恥る人歩
尺せ女すゝきし唐戒
神無月十年あるのまひしく
斤竿ま鰯を　承知行
此ころ此鰭もやる茶の湯せん
床肩兆尼のまあまたさく
乱るゝ涼く胸うし小形に
藪よりふのわする蒋栗
黄鷹乃鳥まあまりて松ま打
取巾織りく碑さゆすん

雲　角　我　亭　角　我　亭　角　亭　亭

綿絹の稲ちり照し野送る
車找ぬのく部る材木
白拍子術の裾をまくらぬか答ね
占うりあゝや氷る此宮札
結構な五笑ま罪とかけて盃
おのよあいての志ある飯
句当の器かゝる片ら有足
七ツは輪るくら葉床くる所
またみて酒のむ腹を張る所
世乃北条乎　おりし　我山
計議ま花を数すい番おく寸

角　亭　我　角　亭　亭　角　亭　角　我

あまつ鴈聴さよ月冬鶯　雫

結ニ盧河邉ニ

舟人の裸手笠や雲の峯　岑吟

柳ちらして川を花蝶　其角

百草の層や花ちるかゝるらん　沾徳

柄さへ大ふり月の夜長かな　吟

螺子の肩ぬきかへて数へけり　角

金具ひかるをてらす濱縁　徳

重ねつゝぬれ代も匂ふ家の風　吟

白紙ある二の汁乃蓋　角

冬枯も斯ぬ愛宕青松寺　徳

星おちて泥の闇乃鷺　吟

花ちる頃さきぬ此襟かくおもかげ　角

見るて抜つゝ月の切命　徳

すゞしに香ぬえさむ川簀垣　吟

神をおし撲てつかしと鳴　角

下よ敵るのふかしすこし老く　徳

志らむろとおへ旅馬の眉目　吟

食此なき志賀の山城月も雪　角

まさ白く成ける花のそら彩　徳

雉狩ぬ袖お出んの簾ま鳴鳥　角

鞍箱ひとつ尻返りひしよ　吟

ごりつはい乳母がおかるる傀儡師　沾
ねむ基茶もしつは裏の狗殿　角
焼けさ木めの猫の腹もおげもらひ　吟
箱がよくえて亂出る也　沾
僧ども皆耳を塞り給山おろし　角
駿河の鞴嵐乃ゐるなり　徒
膝からむ卵の目利笑ひつん　吟
碎へいちからの法のさ姉妹　角
春ゑみんと階子截し月出影　徒
浮つくさりる氏を来く人は勿し　吟
帷子もはや思もこころ秋の風　沾

恭う錢もうれ於りしもの　沾
初鰹声あやかく八字やりきぬ　角
世話の友がかくて木魚の音　吟
あの中のを扱ず花見のけ　沾
一山歌於かの二人乃意　角

八月一日とみのまわけ
ことしくく即事廿二句

初鮭も隠あもなといそれくか　寒玉
精戸のからの女庭遊び菊　桂花
世のすくくと月に手紙を呼よせく　紫双
粉礼も才おかけ篝をるる　秋色

笹竹の眠りさまる林し　其角
功者な碁奈とし世なる友　玉
其頃あてくわりなき酒の媚　花
狩衣ふくし日うつりぬ紅　角
四十から髪の名あるゝ玉搔笄　色
海ましりまれ爵と慈病を　紅
こゝろくやり於杉を吉まにへよりも　角
冬偈をとくつてあくるる歌　花
み捧ケと状まえてけるとかめ稿　玉
尾張も俳也も十分の作　角
山柿の門よあそらんけふの月　色

香をとりつく一弟の古垢　玉
折あしくりくさくみ色を流　花
山除く寶き此ま北杖　色
彼岸年ふるい洞のふる种を　角
嫁を笑のゝあら寡　紅
米橋乃古ゝまくこしみえへ　色
浩氏のかまん身をほしる　花
雨蛙芭蕉にのりてそよぎけり　其角
六月や峯に雲置あらし山　芭蕉
應くといへて敲くや雪の門　去来

相性体力作因縁果

舎利講前に作りし十如是乃
さくら咲思ひよそへこのこゝろを
みのつきは捨ぬ出仏哉

稲妻や思ひの外を縁ても　其角
鈴さくら流しあぬとても餅哉　由之
颶炷のかゝくとみへつや螢のから　角
さくらさく代さんみよ雲井哉　、
秋の田やちかわ乃得二俵　尚白
弓まちる筆ハおのそらかな　去来
山伏の旅やく方よ入まけり　嵐山
二ッ三の山二つのひろりん栗飛から　角



報

まよひ乃蔓よ紛ふかゝる垣根哉　素堂

本末究竟等

うるき探まはりのよ炭乃崩れ哉　戦竹

内秘菩薩行

夕伝ふ手ふる秋のくしを海乃舟　千那

同講のたせ

人の月をあかりけく
笠の御山の紅葉かん

新月やいりは昔あし男山　角

松島諸郷の銭かな

月花は古乃枝よくまての卯　露沾

蛙のうしは耳を入る声　芭蕉

声かれて猿の歯白し峯の月　其角

塩鯛の歯茎も寒し魚の店　芭蕉

是ハ我ら来月とのみつゝける山猿叫テ山月落

とかはりかゆる物なれは巴峡の猿によせて

峯乃月をもいへる也涙衣裳と作りし詩の

餘情ともいふへきや此句感心のくるしみあり

塩鯛の歯むき出たるを浦しや思ひよせ

らむ是乃ん嚢露の形をとりて深く老の果迄

乃くれゐ垂れみつき五尺の魚の店と垂れ

きんなよ浅汐のぬるを去れり其幽深を去れ

通をとる丈夫になる人にしれるへし　晋其角述



両猿の家

彼鹿を追て霊山の會下に弓を拾捨し今

こゝ佛の千佛の一數とならんは誰の家とか以ふ

馬蹄に駿る者鞭をすてゝ走るはむとし

邪人是頼あるのみ

才一

馬蹄に秋銭誘ふて出水の家　擧白

瘦乃嗜なく見そもしらぬ稲　才麿

立月試琶比水木も憎とかて　嵐雪

杖手のけ行　鉄乃鏘　其角

なかれに雪舟さしあやしの乃ゑ

九

舟乃烟のこゝろを　里村
変は實ゝ看を何ゝ能もよひ
山若祓ひ千小策投やる
榛名ある大夫の使師よ一承ゆき
あんもんとれた雨し降る空
毛を被る己の友とや鳴狐
僧千嗅す㕝茄子てんかく
此女けるひわすまぬむつの州
紙をくろめんと際る手乃風
女子慈勝にあくゝい能齒刀
負物なしててしん　遊君



酒乃鬼部とかくは名乗出
この㕝みえる城さ川音の秋
冨士見守へ?しれ月見んにあくれん
祢る建く麻きこりしま
種ッ物上に千ゝ作る毛此年
五箇七道乃幸托引きなひ
長保ある空塹に刀を抜して
代のゆるくせ千し色㕝誑へ
講あへど辛開し浅乃汐
饑体から免若雪とありけき
石焼乃鮎に飽する山のおく

白 角 雪 白 丸 雪 角 丸 白 角 雪

白 丸 雪 角 丸 白 角 雪 白 丸 雪

木芽乃戸にみな佛達
うし盆に参りて後斤誇
月に町屋者太の京書ま
米篩の人間に恵乃恥や氐あ
杉なし古ル筆摺曲ケし墨
あふ稲まく力械付る艸挑
なんる撫り縁しす青池の底
鉄炮の玉堀ま新夜木立
甲斐比根方の雪の装ゐ
山里者旅極楽歩まかく
もかし戸者秋草鉛凧

角丸白丸雪白丸雪角丸白

茶筅むすめよ只せく舞よさん
酒たやし費うはれもかう
月影は満る遮ま賽ふらく
嵐も風も陰陽のうへ
市祝よ擇もちはく伊勢の貝
鰯のかしら住よりし者非
大濱者猟雄ゟ毎岐赤杉に
こつのし果まいぬ影比京
壽アル松つゑ縄まかいれ乃進
言よ慢れくうへの小田原の茶
夜ル鉛くる処さく神よ来の霜

角雪白丸雪角丸白角雪白

睦月みそか忌とす高家
饒よわもまじる味噌の口ぬく
とく人ひとふ帯の結月
祈年する祭の中をわき出
やゝ鼎しく為らりし
秋竹の雀わよ籾のぬ手
雪氏市餅をたやし亦とまる
さりけくさわよ寒さに尻あぶり
ん起とり飯来てし済人
遅き櫓よ白雨なむわし舟
落りみしちや石原乃椎

丸雪角白丸角白雪丸雪角





门の犬赤き白うわゆきのにて
明き愧る厨子書古君
新子莚つゐまち比乃月朝霜
蔓錢あ種よ荒神の御造
十人の塩ふえ又まるき州
菖乃若手掛の麻質
流よく酒田の柄杪名も杉し
来路牛し黒色嶋キ時
執筆謂る禿乃そびれ散捨
天狗さゐしく物かくすらん
花近の畳ハ庭巫よ久人至極く

丸白角雪白丸雪角丸白角

名

鷩虎手幟、旗ともはる
下闇にごろりあわく川柳
日哉もかゝけち蹄綫の月
身に入て自我偈よむ声 惆
小田の秋しま合こぼす人
蝶花にあかさき堂も四乃恩
九十九なりや久しきの春
小山伏新山卧書かすき
ろくちかかゝらく火かちらそされ
衰ゟ餌ゟの衆花夜芳夢
尾花麻竈にまきをゑつらん



雪白丸雪角白丸角雪六白

妹凡の光り田に流く那山
素波手出て終りつる月
船頭もおとつれ衣ゟ帆や舩
向ひ川縁と鈴子大名
郷中の嫁ふらき路ふく
杉もひ虎まふ幸とのぬ猿
いつまてし遲椎の木ひとしれ
涼まて雨ふり流るむ梅秋
寂寞の見ゆ作りよ宿かりて
うるしくくとゑくゝけの鳴
腕掎我さしてふる花小盃

角雪白丸角雪丸白角雪白

つれしとまつて来まんまのとそて　丸
ちからなくも乳探しする新関乃嫛　雪
寐る所ぬらう川ゝ妖その新　角
降さうて星涜ろきる雪兀　丸
朽の糸そつくそ似るれめのから　白
花ヲ得テ山ヽ石ヲ得テ流也　角
流しの瘰まれれし吸へく　雪

才二

艸乃葉を遊びありけり露の玉　嵐雪
人もて定まる自ら去夜半　挙白
風ふんして戸渡るあより雁立て　其角
杢凡ゆさむ誹乃引列　才麿
入れよ出る唐の臥者朔日新　白
古き代をしる塗籠の書　雪
鼎より鏡匠者受領して　丸
一乃挨拶のかゝる田楽　角
箙さく牛の御前の森は中　雪
淋しくのめ胡鯉るくも深くきめるん　白

ゆるき入りて拾るゝぬ雪吉搖柱　角
濃茶をのぞむ多乃水上　丸
伊勢使素袍を竹に挾ませて　白
具足開きいつもあつてや　雪
大判の名も拵しや金衣鳥　丸
花若添生花初雛の鈬壽　角
貫之のむかしらに人きいさ　雪
一ツ木しい時二川木き我　白
水売る若酒の摂待きらしぬり　角
相撲中ろ木し祈る自己佛　丸
雪月や真田に似てる菊花かる　白



城の佛門を節渡り来る　雪
嵯野の頭らしけの多櫛そ　丸
篝火を胡乃たりよ坐　角
手やみや樹を放しまる風の香　雪
笑へて晴るく雷の謡　白
おはも給事もそろし夕方昏　角
医者不聞いかくふの腹おる　丸
我為に乱の笛哉誰吹人　白
娯の家あ姦不成けり　雪
あつ附いあわしけに散ル擲平魚　丸
嵐はいつはにほんをうけし舟　角

朝霧あさぎりくのにほひまくら
おもへし纖(せナ)梅咲きそ兵よける
有さかせまて碧よ於る完ろ世や
ものいた(モノイタ)とゆる 毒(シモン)の 露
見よ疾氏蜂風そろへと暑し
紫のまとんゆかりのこせる
蓬生平嵐の跡乃古ル衾(フスマ)
あしれふかしく緋絶の盛り物
配當(ハイトウ)のよかりあはするよろしくし
満ツ汐浪平擬(クサビ)ぬく 舟
神旗や白帆にのほる飛ちかく



雪白角九白雪九角雪白角

千歳ダウかも棟上乃摃
洛中の人静なる午の時
うきさ世哉とく胡飽らかし
夜月夜元(モト)の山形へ穴舞いや
亦こもも男 灯けす 虫
井戸端よふくあしりてむ衣
せ紀んて彼岸立よ死化
早追(ヒ)よ帰ろくやしぬもれ多
我鉄の塗銭人平当届じ
下女の桶行てろろはん捨ふしくて
りさ木てけ木 間おろく

九白雪九角雪白角九白雪

妹といへる蚊の母なれちてと鳴
つ捨しつゝすい嚢虫も雑し
宮城壁に宮北なりしこそ畑あれ
かく捨し身は馳走の魚鳥
忘れぬに取伝へ者る弓なれし
猪る庖丁 先手 相ともすんで
友誼の弓からをやせほとゝきす
一里毎あわく甚だ假ノ坊
女房も食しけりや八ツ日銭
了さとい縫も女細工貧し之
住謝るよしやらしれてかけ作り

白 雪 丸 角 雪 白 角 丸 白 雪 丸



名さく越あある千の与四郎
侍らくとみれとも河ずッ椿餅
ひ限もん中思ひ灸のあつさと
君の手れ痒き所へ月の雲
室寝つ起すちるの長き夜
紙入の色とも気もあつ了つ居
啄かく哀みよや道芝
関東乃人のこゝ腹底清水
口こりて世は一つ馬黄ヒ
きらひくも蘘いく了れぬ雪れ上
余所のくゞる歳敲くうどん屋

角 雪 白 角 丸 雪 白 角 丸 白 雪

垂ありしが是當人を産の繦　九

ちぎり契り然せん萬万歳　角

雄十

第三

電のあとまでや残るちり尾花　李下

風そよぐ秋ひとり時雨夕ぐもり　其角

ひとりては引板の音のさふらひて　才麿

木綿かすりへありける鶏　嵐雪

青き錢つく夜よあさへ昼寐せん　挙白

薬を篩ふにおとて淋しき　湖水

川添の窓は卯角に向ひあひ　青井

手ぬぐひさかゆる浪の泡雪　渭橋

ウ

我せこがあゆつちなりせん声梶泣　普船

万葉集よりきぬ乃人く　白崇

一ト宮ハ十二丸ほ下ゆらんとぬん　氷花
西戎頭ハ當浦の鯨　李下
雪みるの小嶽大嶽詠めて　其角
性来を止ル法乃鐘引　才丸
伶乃たちち篠音も妙ハ　嵐雪
都ちちしちちあそ明る夜　峯白
妹ハ十勝の状を書きして　渉ヵ
聖靈掛るちらく世取中　青井
ちちち乃傘片つけて取　渭橋
肩さ濯ぎ舟四ツ橋の音　普船
楊結へ花氏とぢきの孫生山　白螘



亀眠き いちむ　春の郷　氷花
鷄續乃名ル重さを冴つへ里　李下
階子あらしつ開るあやふし　其角
愚なる巳を猫乃あらわ縄　才丸
波ハ流きて墨削る釜　嵐雪
後嵐の家と前思ヵ隣て　峯白
枝あるあつて燃る松栢　渉ヵ
山井の井筒ヨ切し玉りしい　青井
いかく定むる遊行上人　渭橋
雪を見て笑もこらし二つ子を　普船
色町ほもふ朝のあり梅　白螘

餝りてはのく捩さ向の町　氷花
三日の日になる講釈乃声々　李下
小名月おもひもてあそふ　其角
嫋ふたさゝせし菊の綿　才丸
あさなあさな汝ぬれはつて垂扇　嵐雪
かどかどかさなる柳をくハされ　挙白
通りかく入しとぞる斤れ戸　湖春
拜みつけぬ姥か分舎利　青井
搦羅もれてなる流れ車舟　渭橋
雑煮ってう家上下乃関　普船
腥さ侍達ま小うれはつる　白燕





うし泉の柳算乃絞ト　氷花
但る食とうきぬるうきふ門にあれ　李下
米の白し若秋ゆきかなり　其角
半天の二百十日を入あひも　才丸
洋粧の歯乃撰縁の主　嵐雪
心中武ゆえしや胸より花楓　挙白
系のかきあふ打ろくし多　湖春
夕灯女嬬の足音うれしくて　青井
徒より盗む節分の豆　渭橋
道表に底屋の多けも免し垂　普船
八乃戸九の戸紅乃花摘　白燕

大男涼しれ棒をつゝひけり　氷壺
梵天のなかし澪の志るしみ　李下
一さんに驟のり込ム岐乃岩　キ角
桜の濡をすらふ落合　才丸
線香の詫ひをあくら春の座　嵐雪
雛作りて下手進めて才子　挙白
人日の首ふくらみ扇にて俺て　湖水
李もしらあまれ身ハ汚まれ　青井
繁昌哉知られる杉もしろき　渭橋
茶壇よやうん住にて乃土　普般
此石ハ家を目利し山の雪　白燕



り脚ゝ小くゆきあひの森　氷花
波風を大隅薩广治りける　李下
人質のくすみ命うくかく　其角
沈着那蘇も陸斯もころがへ　才丸
歩ゞ行しけは配るなし常　嵐雪
出なきし殊に越ユル丈乃前　挙白
醤油の知り起し曙　湖水
帷の銭干高見る青梅垣　青井
護ナ堂出ぬ匹如身乃袖　渭橋
うとと雨もし三の病手存命ル　普般
みなら川なく皆乃評判　白燕

漕つれゝ花も月夜の女舟　氷花
あちも洞の流れかんちくゝう　李下
雨晴るつゞくはかゝめ所はなく　キ角
通ひ路経には早苗あるあめ　才九
登途飯をよくよる人の振らん　嵐雪
衣を包む俗とこそすしや　挙白
うは玉れ多摘を口を吸ありり　湖石
寝ぬを思ひに斤あぐる来　青井
腹立やさのこゝ鳴り川衛　渭橋
関をもく譬はらひ切　普船
神世の料刈銘に勇試くて　白燕

貞任やあはれみつ有まきん　氷花
其分相心ねれへと觸流ス　李下
ウラ一羽になる花の時　キ角
月乃宿あゝすうしにうし、ちゝ　戈九
おうかめりてざゝんさ乃春　嵐雪
嫐に鉈さち添て山婦るみ　挙白
痩男のたし喜出ゆく　湖石
銀起れ门まり涼しく掃除て　青井
枇杷楊梅乃驛く千　渭橋
傍流済を水漬ふあく通りぬる　普船
伯父のゟれする刀一本　白燕

去閑より書院を高く見おろして　氷花
登猪子むかふ曙乃山　執筆

風月乃なかめハ昔より詩歌にあらず
来る俳諧にて風雅を尽く新しく道に入つると
此頃ハ世の人のみなかくしある時人来りて
今やう此句をからり出して風雲乃挨のかたち
あるかことく水月の文章をなすにくらり
あるハ上代のよくやすくすれハなるもあれと
たゝに常よをのこいひなかくと情なくさらや
古人いふる事あり景の中に情をふくむことかる
欲まていふる　穿花蛺蝶深深見點水蜻蜓欵欵
飛これこそふとかかろふハ心をねむれよと老杜

そ他の國にありてやまとしぬんとやへまくらま
京兆中に情をふくむものあれやまとうさかく
ろくのつきくさし中あり詩や哥やこころの
絵なりと野渡無人船自横といふかるあわち
佐山なともなくはなくしれなをおもふもれはそこ
おしの地を縮めよし路をこしれをして孫にうつ
て方寸を千里にくらくものありあるはかくち
なき花めをも染なしめいろなき花をてみほにし
筆を孔に時の花をまつゆれ花あり時の花を一
夜妻にたとへるに同し顔の花は彰者乃叢
となき母乃形をし人これはのもれみいて



はりやすく絵のそれはなをさわりになやすし
人乃師とするもれも北へけなりて他乃
このむ所にあらひくる色をそくしこらをなし
するなもん味なる人のいひつたへ日比又さる翁
芸かなある中ありて鳥の深巣れ時によりき附
にあつくそ風波にまされさるうこと内にこころ
さしをなつへしとなり 余 笑ひてこれをうけ
かゐいひつくれもれさあまり似と腰意楚
國をわすれまとうやうされいへまにしころ物旬を
このころ在様なれわたまぬもれ中へつく
ろふ辨をつゐやすあみなむや漆園乃書 いふ

まれなる志きしまの道も志てさるによりいかなりし
こゝに其角子あつめし栗乃続をえらひ
て序あらんことをもとむるもみなし
くりとはいかにひろひのこせる秋やは
ぬらんのこゝろさへなかりしやおかしかりし
なりしはなかりもあしくすゝきいひさかしらせめ
といなひつまをこゝろ紙乃されかりかく
なりわと和いひやまのよつく太子ならぬ
ことを序とおもも何となかりとも名つく
へしとあるへけれともあつまてさわぬ

江上隠士素堂



# 續虛栗集

## 春之部

改正

新年若佛慶とハ中ある八十年　任口

誰やしかが形に似たりけさ若春　芭蕉

飾てたちに嫁ひも參る雜煮哉　自悦

棄さして榮り畑や老乃春　杉風

年の花富士ハつ目なるすかたかな　麋塒

うたゝくの隣をきかん四方拜　文鱗

元日や家にゆつりの太刀帯ん　去來

志ら梅まかくす名もなし古男　擧白

はんくの餅えそり春日の那 治蓬

蓬莱に見遣(かよひ)かゝる日出さよ 山店

拘む間も花をさする名日哉 魚兒

鶯や雑煮るゝ里つき 尚白

松かしろの春なかなる日和哉 千春

松も我これ年なりける初日哉 觀水

日出春をさそうに鶴の歩哉 其角

草まくら蕣うつ人時どきん 山川

松とりて七種たゝやすあらし哉 如泥

總角(あげまき)の手にし手毬や蕣つゝ 野馬

遊大音寺

梅か香や乞食の家も乃ぞかるゝ 其角

岸の梅松を杖突すゑのれ 文鱗

梅の花義経なりし姿かな 曲水

老懐

蛤よりは蛤をとる老の貴もせて 芭蕉

露乃ちうほうるく人の縁かれ 嵐雪

古草や新艸まじりつる土筆 文鱗

よく見れば薺花さく垣ねかな 芭蕉

春のまる川邊をさく根芹哉 冬市

路くは東(つか)のてもちみ杖菜られ 治德

玉ほこ乃縦(つかふ)にあれる杖菜哉 全峯

つゆしと蝶はにちやく蕨かな　由之

春行

昼乃鐘第木きゆる霞かれ　仙化

志ろしと霞ち形るか蝶哉　沾蓬

白鷺れ越ゆ霞む片帆かれ　紋水

村の鶴つくえに見ゆるかすみ哉　巴風

巻付く筧をはふのすくかれ　野馬

寒食乃烟ちきれぬかすみかな　青丙

同游とかしまに詣ける波乃

日の波を龍からに武蔵野の月

といつきのさくらにせんとかく



松原や旭見ありあちかち海　不卜

海雲の浮巣座に近き鈴白哉　峡水

浦松や鶴の羽に曇る春白哉　扇雪

かとかわ申天

巣の名所乃幣にかくかり　村雀

松久の一家うきあひあそひて　峡水

中山の塔を見やりて

俺月にさこも捨ぬ情かな　同

鹿さき野乃塔みよとくや霧ひとり　不卜

宿かしん去冬を松乃すりはるき　不卜

旅行　こゝろみせしんむきの翼を拡く　琴風

のどけしや鸛の飛込鷺かくみ　半残

巣立より母をたのむ雀かな　舟竹

すゞしさに肌なつかしき娘かな　三園

雀子やあかり障子に母の影　其角

結廬在人境

夕日影町中に飛こてふ哉　仝

くわゑし麦わらぬふ小蝶哉　曽良

世はつねそうつる身の閑なしぬ年

肩絹をやすむる蝶の袂哉　巴風

青柳はいよく眠るこゝろかな　嵐蘭

汐すりに身をつまれる柳哉　衛門



手をあけて児立ちふ柳かな　魚兒

曲尺を出けしまかりぬ柳哉　其角

柳はいね鼓のうちす歌一兎もし　同

ねふかすつもりにつゝを濡らせる猫あり

妻恋やと蹴ゑかくゝ阿野猫かな　魚兒

哺を分けし孤蹴乃恋かな　觀水

春晴

淡つゝ系虹をかける藤かな　其角

重三

不産女の雛かしつきかなる　嵐雪

雛とらぬ家も女は信ありけり　孤屋

小式部が一世を雛の小袖かな　紋水

所〻乃顔にかゝる桃乃宴　舉白

もどかしや雛に對して小盞　其角

いもうとのもとにて

世なれずも紙酒かはん姪が雛　其角

草庵

花乃雲鐘は上野か淺草か　芭蕉

鸛の巣もみらるゝ花の葉越哉　同

木のもとより花のちるを見ていはん哉　風虎

ひとりさきをこゝろにて

あまりこゝろ小くえまて

獨もゆく婦さかりも行花の山　文鱗

いろ〳〵より花よむ鍋の中　舉白

花折れと君が意あしくいふにせん　仙化

さくらかれて基まかりける花見んぞ　安重

何事に人走るらん花さかり　由之

花うくていか庭の腹なをすへき　巴風

朶子むしも花の日影いふうぶ沙し　魚兒

猿楽乃花ちりける下

花盛古人もうつしを爲あり　七人　萩露

詠唯一心

おそまく人のなよこゝろ夕あれ　觀水

妻ふるぐ我人杉ものみ花見ん哉　破笠

去々年乃花にハならぬ小袖かな　蚊足

花を得て人の懐へ産子哉　卜千

御霊屋(ミタマヤ)ハさくら入あひ乃花盛　風笛

あらおかしや花(ツボ)ありける花の山　嵐雪

花にあらぬ憂世男乃悋気哉　千子

花見んと母にほころぶる児　其角

日々酔如泥

花椿市乃礫(ツブテ)にあたりけん　同

瞽與

川原にて鱅(カジカ)流るゝ花ちる那　露沾

薑精(アグドコロ)あるゝ嵐乃日の影　其角



去年同童衣冠をとゝのへして　沾徳

壁ぬきて間(サ)風残る白雪　露荷

月冴て砧(キヌタ)乃槌のつまじや　嵐雪

人も風ひく私笑ならまし　虚谷

雨(ウ)城乃淋しかる影あるゝ也　角

初秋半ば見て虫の声哉　沾

蟋蟀(キリギリス)落く小声あるへうつり　荷

楼ありうたる暁乃雁　佺

数うつ田中の月夜悲しくて　谷

俺くぞする僧の振袖　雪

思ひねを揚ら屋ゝ閨涼し　沾

三たひ浴て夏を忘るゝ　角
我鞍に蝉のとまる石すゝき　徳
砂吹上る堉乃松風　荷
燭とられてむかしを偲ふの浦　雪
小乃江生き光しりよ　谷
濃墨に蝶もおそるゝ羽を染る　角
永を涌波達生き乃窓　治
うれしさを家に紙にさせ　荷
東ふりまくもまた惹れ奥　徒
常陸なる板久ふ文に友衛　谷
癸手懼て泪む江の鮒　雪



松杉の石の香店乃語らし　治
風夜くに寒笛を吹　角
着きけて月尺の旅を荒るらむ　徒
御廟の湊出に被嵐けし　荷
角切ふ祓ふ放を鹿乃影　雪
餅は食くく鷲乃陰　谷
山おろし髪を並べて　角
驚く毒の夕の音　治
峪貫ふよ漆を人として　荷
雪の西月を休めう塩焼　徒
萬葉をよみかし名所式　谷

霞こめたる又岩城山 雪

日當午

凡なくてかまる花落る櫻哉 蚊足

朝酒襟をうつ冬とさらし衣 湘風

月清くわやれもれく尺四山櫻 文鱗

雨ふれて地息嶋山んさくら狩 由之

一すしに菫ふみかしけ清さく哉 全峯

炭ひきわもひとく櫻のあさすれ 野水

二叢の山婦さし帝

あまてくとらぬ葉のひらら山櫻 枳風



ちるおくく酔のまゐる夕さくら 自悦

婦わりてやくら[illegible]春色らぬ 且藁

錢士乃菜の[illegible]櫻らな 嵐水

禁札の名もなき寺乃さくら哉 卜之

石竈にさくら蒸しく夕かな 松江

實謙人干しまはらされ 孤屋

さかしの人ふもあらぬ櫻らな 野馬

抱付て指をのうく清九哉 魚兒

剃髪

あかり乃水にめしてくさくら哉 荷兮

勢田眷望

山さくら烏帽子を送る於ゐる乃那　其角

仁味夫

竃の中から来り影りしさらし手拭　仝

田舎つまとり名もなきちらしの花をけるは

誰が寺か放らしもれする花のまとしん　枳風

釣臺

舟秦ん洲濱乃花の夕日かな　沾蓬

山川の鯨の餌とく瑞に張る那　冬市

山吹を吹さそる蜂乃の羽哉　濁子

出て行しあさしおそき早し　羽笠

やまさくら女松生えし哉　尚白

あさ花たる芽を木かくれや花ふし賞　沾荷

鯨山を敵手のつまり嵐つし　守斉

咲かせても待人またぬつゝじ哉　破笠

木蓮華蛤の脇りや淵のなき　文鱗

遊びとんで干しき蚕の門　三園

夫もえや山吹しろく首若し　素堂

春朝

蕗あけてよち買に行きま?　嵐雪

春昼

手の時おほつかなしや茶摘歌　蚊足

春夜

あそこれ乃端居さしむる涼しさ哉　其角

艸菴を訪ける比

永き日も轉りたらぬひばり哉　芭蕉

原中や物にもつかず鳴雲雀　同

とゞまりけるや中ゝに結る

啼しも凡に流るゝひばり哉　孤屋

烏帽子を並べし櫻一むしろ　野馬

山を焼てかゝ寒く御番春くゝ　其角

光けうとく個に入魚　孤屋

水高や擬のうけ乃安らう岩　馬

擢游して雨中やさちの松　角



禅僧乃赤裸なる涼しさよ　屋

李白ヵ募る盞乃數　る

俳諧の誠かさしん草のそり　角

雪乃力よりかねル音　屋

桎原や揺渡る石すりけく　る

男女の歎き女の所き　角

きぬくを盗入ども立さらぬ　屋

のきれぬさうかゝる髻　る

血乃涙石の如筆乃朱をほして　角

奥の枝は燈る枯苗　屋

降くるもにあふれの音ス之　る

名

月夜の雉子乃ほろゝとなる　角

せきゝけふ鐘念あけく保甚山　丞

晦から遠きよしかりし我そ　角

物くる数薬ほむあしきよは艸　言

あ智ゝそれまで角入てよわり　丞

親は鬼子ハ口やかましき蓑虫よゝ　角

わらけちらん月の夕月　言

唐猫乃きらゐ数ニ吹あひき　屋

四手漕入ル舟の門乃中　角

うらゝ猿す彼の浮湯の雪白し　言

葉すゝ行すゝ盛目乳去　丞

珠数引のあまり淋(サビ)しく寺尽て　角

あさき新物乃それで祈かる　言

被衣(カツキ)そのおをを犬のとうむらん　丞

うねあふしさゆる藪(ヤブ)乃切ゆるぎ　角

五月雨塗(ヌリ)すほ菴よ皆ことせく　馬

海乃夕そも大津さゆしまよ　丞

思ふ卯と物笑(ヅム)ひましむもの隅(スミ)　角

清くし摘かる麦食乃友　言

夏之部

伏見西岸寺にて此花上諸侍のこく

夜錦集

本尊(ホトケ)は油のけさに居ぬ夜　　意朔

蜀魂(ホトヽギス)星に背をする言根哉　　暮角

郭公なくなく飛ぞ忙(イソガ)はし　　芭蕉

渡舟や犬もこがるゝほとゝぎす　　其角

杜鵑(ホトヽギス)鳩(ハト)を後立声やしらん　　枳風

妻あるを伴ひて旅立ける人に

ある此間妹(イモ)よひのへせほとゝぎす　　其角

時鳥一声中する鵆乃声　　杉風



侍乳山三句

舟遊とらへ来ぬるおもひ沢　　如泥

衣くろきけ織多の太鼓子紙　　其角

ほとゝぎす麦搗(ツ)向(カス)手繰りゆく　　岐足

数足中にてとめられて

郭公変つく飼ふこしりけて

のきてうら渡る青繰(リキ)乃舎　　其角

川風や衣干(キヌホス)揖(カヂ)に拶らしん　　角

樽拭つくしさる皆童(ワラハ)形あり　　数足

初秋乃潤をわきて月おれや　　同

扇流日記(ニキ)を捨る関の戸　　角

萩のみに所乃土越包を於　足
備と咄して皆静ぬる　角
瓦工おとしらいそく入桐平　足
神鳴つゐきこまき詠く　角
於ふしの狂惑つしき命哉　足
鴻原近き吾草の庵　角
忍啼ゆるき娘らんみ路きしく　足
おい髪惜む月もうつひそ　角
江を露ヶ亭の蝋燭白く形り　足
言るみ信濃る断田の秋風　角
む盛衰ふくしゐ首き大て　足



勇士の土産は梅を於り　角
美女乃臙日長けきとも暮安し　同
契めしらま奥乃繪を書　足
或ハ志しく住吉浜よみ遣され　角
乞食乎馴て安き世を知　足
町ゐるり二款うて娘茶筅売　角
高夜ゐ飛田の瓶くけり　足
燈籠枚乃擬よあれあけて　角
晩稲花さく湖乃隈　足
蜻蛉乃一かさまりに流ら形り　角
隣ならへて機の綱ひく　足

通りぬる冬の驛乃夕あらし　角
降りしきる雪の玉味噌　足
釜かりて松の鍬拭ぬくなる　角
反故ヲ読ゆる閑な倫ミず　足
顔あまさき都の友ぬれあつりしを　同
豆らる数も人に笑ハまじ　角
世中乃花に駝のよろかひて　可
まよりたにあそふ春の日　足

妾在閨　十八句

眉帚乃露をつ鬢子乃白き乱　巴風

螢消よりも帳の襦とく　仙化
ねとめぬ二つれ基笥は枕して　キ角
袖口寒く煙り炭を次　風
旅人の哉よむ音を夕月夜　化
かちりをと生ん木稗の名　角
隠家や杉垣すさむ秋涼し　風
傘持去りし君り名を問　化
滝見して乱るゝ髪のあくやうふ　角
山鳥うつすおろろ乃盞　風
花の枝独りは花そ山のあし地　化
翼汁月上下さぬもしの去　角

殊更に落雪かゝる門かざり　凡

いさよ出口乃せん茶の音　化

道心にかく志さ波恋もしき　角

泪おちゝ小佛乃閑　凡

一鞭に数行牛の月未新　化

薄とりゆく遠山の腰　角

四月八日母乃こゝろありけるに

身にとりて衣かへうき卯月哉　其角

初七ノ夜ハゆめみ侍りしに

夢に来る母をかへすの郭公　同

五七の日追善會





卯花も母なき宿ぞ冷じき　芭蕉

香消のこるみじか夜の夢　其角

色くの雪城兄にゆり月涼く　嵐雪

各悼

卯花に目の腫恥ぬ日数哉　露沾

数のあとよれぞ悲しき別哉　枳風

肩ろく我に向きかきつばた　沾徳

物あまたありし林や夜木立　挙白

嫩入て音もおしき時鳥　嵐雪

夏草に涕そけし哉　蚊足

蚊遣手になさで香く梅哉　去来

まきや夜業するよき風の音　野馬

菰子の花ともにうつむく涸かれ　全峰

むら人もの声はるにかすむ被哉　魚兒

出女の袖よ夢の夜大きるに

うしぬの中えにみへする鯉かな　其角

その夢乃戯ル　嵐雪

下部等に鯉くいする日や佛

端午三七日にあたりければ

家鯉ふきうらむわしの魚か那　其角

何となくても菖乃生ゆかな　紋水

兎つき起て菖かゝる日向哉　魚兒



蕣しや菖さすの日也風乃音　枳風

幟たゝぬ妹かり宿さきさる雨かれ　彫棠

まる手乃る侍清し花菖　仙化

白妙子も引もさ揃ふ夕かれ　魚兒

花菖子や棘二またれ垣の中　沾蓬

禾村

筍よ升よる奥にて犬あらん　其角

鞭やかり寝の家乃隅よりも　嵐雪

自詠

髪そろへて容顔蒼し五月雨　芭蕉

当きりくに三日月拝む五月哉　去来

さみだれや潦にわたる水の径　沾德
ちるときよ影ある曇る目鏡哉　巖翁
躑躅を鬪乃はかえり白丁花　巴風
菅笠に娵をみせる田植かな　吼雲
合羽着て友となるべき田植かな　其角
姥乃影映て田植の女かな　野馬
夕影や椽に着たる早苗笠　冬市
雨の日は早苗に体を燈かな　由之
暑き日はやどりをもとめて
入日に田守乃ひく黒とんぼ　觀水
者ちらく男ちかひは田植哉　不卜



都乃人小桶に動かすはなし　高政
夜をのこす水鶏も老を敲かな　濁子
續松もむすほどき影蓬縄かな　玖也
月も入我盤もいでる燈かな　風虎
甲斐山中
山賤乃おとがい閉るむぐら哉　芭蕉
古寺や僧なき後すむ櫻桐の花　三園
むらさきのもとにて
世をすてて安く住まる櫟かな　自準
田家
むさくるしくて螢もるさし夜半の月　杉風

はなれてはまた放さぬほたる哉　魚兒
蚊やり火に燃けて逃るほたる哉　溪石
消ゆる芦のすゑるゝ蛍ゝの那　野馬
寝起よ人しつまりて蛍見ん　孤屋
暁乃夜半残る蚊遣哉　観水
木津へまかりて
山里乃蚊や昼中に喰ひあり　去来
かやり来て盃の底とふ夕ゝ那　黄吻
おちの人涼みゆかのし枕蚊屋　千春妻 綾戸
旅ねして香わろき草の蚊遣哉　去来
枕あてしや吹おとしたる蟬乃聲　卜千



啞蟬乃鳴ぬ梢もあはれ也　杉風
洗濯の袖に蜩鳴夕日かな　杜國
土さへさけてる日にも
蟬追ふ妹高ねめや風作り　其角
かくさぬぞ宿は山里乃風の味　歸紅
風吟よ松陰せたる紀日なさ哉　李下
隻此日の入あひつるよ雀かれ　欺心
ちか川の日に袂まつほす汐湯哉　好柳
誦錢神論
一文乃錢いくゝ声や夜の水　牧足
變越えて涼ゝちもとる清水哉　嵐水

合歡木乃瞻りつくぬるゝさ法なあらず　仙化

さゝれ蟹足はひのほるしみ哉　芭蕉

こゝは竹きりにまかせて
山林の中にもとめけるよ
市原ちかく

陰になけ小野の小町も蟬の空　千春

虫をさへむくと擇木の小町ほされけり

九折のほか寺ある時　其角

山鳥も声をきく紀園の木立かな　千春

儒しらに貝ふく僧もかんこ鳥　其角

謙家に樹をすく人あり
その時先ほをたて
おもてに成まりす



何ゆゑん六月桐を植る人　同

蝿を打心法其精口耳粗
蝿を打てるに生死を輪廻せん　幻吁

納涼

時鳥ひよし士用初乃あ拙山

出るる暑そ朝起晝寝夕すゞみ　其角

落得閑

世をさとりて過に法さく涼しさ哉　文鱗

人の子ほめて猫借るすゞしさ哉　李下

宿二尊院

棲ぶる欅にすむ夕の州　冬市

涼むなや愛宕ともに吹かれけり　観水

更る夜を湊に数ふすゞみかな　去来

涼しさや雷きゝて夕間昏　冬栢

塩竈や松の籬乃うしろ涼し　由之

暮まで祭見るを涼みけり　虚谷

奥刕黒塚にて

住なれや鬼こもるとも夕すゞみ　維舟

源義経平家追討の時
上洛に鐙をさりけるときく
其所を鐙摺の石といふや

あぶみすれ石を踏んだれ夕すゞみ　同

逐涼　二句

涼しさや出ん武蔵野れよばひ星　其角

闇乃夜やすむ園乃あまがわ　文鱗

雨後

つゆおちて水ものひさし蓮の花　野馬

蓮うえて師の閼伽包む清水かな　卜千

見るゝ麻刈笠見えてかな　全峰

昼顔に午ことゝる蟻乃日陰かな　且只

ひるかほの花しほるゝあつさ哉　破笠

ひるかほや猫乃糸目になる思ひ　其角

山ゆりや打む胡瓜乃花の寄　獨子

江州にまかりて田郷

干瓢を右刀の鋭ふして剥へき　自悦

涼しさや日陰にまかる角豆垣　鉤雪

一花も不さく筋あるささけ哉　虚谷

艸菴此急夜

夕立に家流しまける気合哉　巴風

夕立や祢巻しまるわらし哉　仙化

夕立に雲あつく鳴音の亂　其角

夕立や箕に干ス粮も走りけれ　僧宗派

夕立に座敷見られぬ主の那　沾蓬

午熱

病ム人へ近付ぬひやる土用亂　蚊足



鎧着てつかれためさん土用干　去来

うるしねや揚屋に似る土用干　其角

或人所持の坊んさくに

何もなし我か頭陀ぬくろ夏被　譯庵

秋之部

日ころわぬ友やあふよの牡男七夕　風虎

天川あしも蚊屋もゆかりあり　自悦

星合や瞽女も彩ひの糸とらん　嵐雪

欅を星にかりぬる私かれ　槿花

昼計や船引ともえん天の川　女 綾戸

大内にかりねまん星まつり　女 千子

星合やおそふまつゝ猶かきん　寿閑

旅思

七夕をかへぬ旅の孫起哉　由之



星合や女乃あまて祈い刃ん　其角

贈槿花堂

蕣ハ曲ル念ひ乃一ツかれ　露沾

蕣や嘗乃日影のうすきにし　蚊足

蕣ハ二人なか見てあかしき哉　杉風

驚夜雷

よれ晴く蕣雷に潔し　其角

寄李下

いなつまを手にとる闇の紙燭哉　芭蕉

いなつまや紫山々のあゆむ川向ヒ　岩泉

いなつまや杉あかし藪のやまふかれ　湖風

いねつきに目をさまされし寝覚哉　魚児

遊女とさいふ者ちかひけるを
いさめて久しくあはざり
ける人に申侍る

露畑此世乃かりの身うけけり　去来

父母乃新灯籠ゆかし光哉　由之

なき人の数を夢かしにおもり　全峰

魂乃跡まて栗も鼠也　文挑

読経をにらくひんづるに衣
骨まつりを見るく

女餓鬼すら盆會に逢や法の庭　文鱗

盆まてハ秋なりき門乃灯籠哉　嵐雪



貧

魂やまん祭しぬ宿ぞ恥しき　牧足

對愁

さみだれし人や膳乃玉まつり　其角

きまつく門乃乞食の秋となん　同

送り火の山へきのみれとゐし哉　観水

鯛つりん浦待ちて見きかす玉　苔翠

志賀の花盛みえく

かれ野のゝ中く踊に顔をさり　自悦

躍子よあさは齢乃艸ぬらん　去来

盲月を艋きてく玉火ろ那　春雷

吹よせく江乃一隅や水と芹　苔翠

茶せ約て手習もとめぬ小舟乃礼　春曙

禅師にまうて

おきつれにもむるものなし常花　文鱗

遊女の酒もりける所

咲さや禿(カブロ)詩乳(ブッチ)のかゝれ萩かゝん　同

女郎花よりの棒乃花形るの　景道

下闇(シタヤミ)をまろくゆき比乃一葉哉　冬柏

常陸へ渡りて

独(ヒトツ)舟のあとに越ゆる稲葉哉　金峰

花の秋草にくらひあく揖る哉　曹子

萩原や一夜はやどせ山の犬　芭蕉

旅宿

木槿(ムクゲ)垣花見おとした寝入りかな　観水

入湯乃比

夕萩のはせにみえりつ府[illegible]哉　紋水

木曽山中

秋もおすくなまはる[illegible]読(ダク)夕雨　皋白

鶺鴒(セキレイ)の啼て雲まり寄ある山路哉　同

山吹くの鰍(カジカ)に秋乃しくれ哉　紋水

兄去来に伴して

伊勢へ詣ける手引して

初旅のくさ詠成

伊勢ぞ乃よし死なつ肌を人かすのゝ　　女 千子

柴若の花寄もちかぬるつゝち乱　　同

ほけろ女の骨をよそ切羽風ろ哉　　沾荷

聴閑

蓑虫の音を聞に来よ艸の庵　　芭蕉

守不ゆかく

何も音もなし稲うち喰て螽哉　　嵐雪

むしのゐを見たる草乃一つゐ　　治蕳

聖護院の宮覚寛法親王

こゝゐ入まいらせ
拾ひ侍りて

峯入は宮もわらちの旅路哉　　宗因

かけかねの見ゆるもて成す新酒哉　　其角

早稲(ワセ)酒やほころびかけし竹の筒　　塵谷

さりしさい鳩吹(ハトフキ)捨る音もあり哉　　野水

善光寺出て比を麻乃すゝきかれ　　其角

笠とりて高きかなる祖れかし哉　　紋水

秋の野や飛入る小萩より小鳥　　塵谷

世中やわらいくて四十かな　　風虎

草庵乃月見

名月や池をめぐりて夜もすから　　芭蕉

鹿島に詣けるに宿根本寺

雲折々人を休むる月見かな　　同

さらに又て誰が住はれる月見哉　同

名月を戸明て又も寝ん哉　枳風

月見して蚊の声よけるたしめ哉　李下

旅人と成ても見たしけふの月　觀水

月下獨酌

月見るや紫式部妻ふして　蚊足

月清き萩切ほどく宵かな　巴風

寺々しも東むくらん月の昏　去來

旅人とあはれひなくて月見哉　野馬

月見毎雨に剝込ム椽のしき　孤屋

椽の人月みるもや木曾の棧　破笠



宗鑑の沐ふ寄のとまま
貞室か若たつ心かし
新年籠て三人の曲

古襟月に離ス我を宵哉　文鱗

蓬衛中小屋繩かき
打かしの休息
休んはなれき

月のよひ我里人の藁うらん　去來

月はよかり富士にいちらし皆晴月　冬市

月満て欄干うつく宵の舟　由之

盲よりの唖のかくゆま月見哉　去來

名月や御堂の鼓かゑて笑ふ　其角

良夜雨意

つきよひもこころにくしや十四日　同

翠幕の三ヶ月見ゝるよと首れ哉　彫棠

月撰人ツとのゝ髭を

閑る哉ら本おもくらん帆飯の月　虚谷

家郷の思ひて妙ある月はいらん　魚児

商人も見る夜ほとくや西瓜月　文鱗

名月や露のひあるる土まれ哉　且只

名月を寝る哉鳥の乱れ哉　濁子

ありけぞこころひの月光影の哉　岐足

中ニ出る月一節や雪の雲　似兮

名月は汐よなりぬる小舟哉　吼雲

鉤若うけよ松のまゝ月見ん舟　一林

名月や二夜名月ハいろあらん　如泥

新衣剥ゐつゆけるは

秋の夜を枕寄ころり寐覚哉　紀叶

一夜より様子ゐ西瓜せきぬ哉　李下

旅なりゝおもろむほうになく

雪をわけのとゞろ人もなき

けりそのみんつゆのりを

秋萩折ゝ寝あらん旅の夜哉　女 千子

長き夜旅くらのきよ折まけりけり　去來

寐かねてまくらのよ折りの雄なる哉　破笠

旅人手村ことよる成きぬる哉　全峰

山里や樵のかへるまぬして　枳風
子の泣てねんしまひし砧哉　山川
ぬかさとの火燵を打の砧かな　蚊足
よしのゝ奥に旅あしとさ
なからる寝るや坊か妻　芭蕉

獨座

なきらか撫て庭の𦾔乱　酉比

秋興　廿四句

面白く物うきまゝの砧かな　露荷
灯きえて　詠　霽乃雨　其角
櫻を欝嵐の窓の月澄て　同



ちらくしや霙かゝるむ襟寒し　同
かまちら綿色鷹かゝくおふ　角
山寺の鼎をわるゝおふ　荷
雲ふ笠ぬく暮露の起臥　角
新参が晩をおもふ行の　荷
平あけて家涙の落るみ　角
夕闇の道まる馬は曳離るゝ　荷
岳やとよ　三ッ石の案　角
先独り走めずる人をかしめ　荷
酒買てとりし草菴の内　角
水ゆるく橋乃上より細寺　同

遊びけりあそこの鴨の子　荷兮
夕月に[illegible]雨仙をくりかへん　角
多賀の戸立る　電去る窓　荷兮
夜寒さに妹が衣きてあつる雪　角
召シ此車小[illegible]ひさる往　荷兮
御鑑袴をそ乃ちら紙　初桜　角
四方乃連歌は春の大和路　荷兮
き渡ちるも傘に汎かん纏月　角
牛あそへき銭ちちいしろ　荷兮

重九　三十九

なき名所ならぬ花へ菊の丈　蚊足



四十

年浴に菊おとろく欲にかり　同
菊の情春やあるぞ秋も札　露沾
御蘭男あらん菊ありせ　巴風
辛しの花の香々や秋の菊　衛門
篭鳥のゆるすふうとし紫の菊　其角
菊植て露に水あむ朝ぐ那　岩翁
以て家七百の師も菊に孫ん　其角

艸菴雨

起あがる菊ほのかなり水のあと　芭蕉
痩ながらわりなき菊のつぼみ哉　同

雨至し地に這菊哉先折らん　其角

雨数日市はかくあれ菓の茶　文鱗

旅行

落栗のいがありとても捨られ　観水

落葉に萱ふきかゆる嵐かな　透雲

むかし為尺甲斐ある詠や椎の音　岩泉

ぬられしこぬや椎乃九折　三翁

茸かる夕日好もし花薪哉　観水

童さへ捨し径乃いくらかな　同

柞落て松茸みえぬ白かな　魚兒

松茸や松より奥の寺の秋　孤屋



松茸や一日しく乃雨の露　三翁

京出済日

膝臘ききらにおすゝき哉　其角

かつちわう蒿に掃る捨かな　同

谷迄もと川里餉よそふるすゝき哉　冬市

旅行

影書や楷のくらまる松乃影　巴風

家様の萱や浮世乃村時雨　遊女 薄雲

峯の松鰤あらしの夕かれ　冬市

秋山　二句

甲斐かねも人千出ぬ秋乃夕哉　露沾

秋山や釣もゆるがぬ轍の上　其角

閉門覓句

秋さむく日土敷くまくら哉　三園

なのきさく菊縷縷よ垣の中　舟竹

秋盡

僧の入ル縄乃すゝれよ秋の昏　不炊

こゝろゆるきうれとかやの秋わすれ　一鐵

六容　歌仙

述懐

乞食にもかくれぬ衣ぬかし哉　破笠

その秋を責ル虫に蟷螂　其角

よるさへ此夜は憎む音やまして　仝



月すいゆるをうき柴の数　笠

此身を走らぬる鬢の雪　同

心ならぬ悲歌のみありしに　角

哀

人まねする戀する袁乃上にはよ　同

別きて尻と床に金おく　笠

名にうた名讒をうかゞ馬とて　同

あちとあつてく妹にきぬり　角

鍋よりて銚子の市にうかりけん　同

色酒の世にありては娼めく　笠

旅

川あふ火焼しやとり波まくり　同

少捨てもき名の稲磨　角

秋風や笠に宿かる天か下　同

松を産所にうまれし月　笠

米買に行く都へ多せの雲　同

雪消を出る甲斐の高工府　角

無常

夢のまかるゝや堂をくゝそほし　同

死出の鳥乃蝋燭を喰　笠

衣し吉闇の捨子れ啼行ゆ　同

家もとらいころぬ髪結　角

幕ま躍る向しんたかれしと　同

聲よふもきゆるかけほしの秋　笠

月澄て僧と濃ゆ嗚行所　同



佛ほどりて暁をおり川　角

定めなき美濃の谷汲お納兌　同

鐘撞にあらん狩たつきを山　笠

癩乃もれらぬ富の世を悟り　同

柴の戸深く維摩ゆらん　角

神祇

乞食に度會ゆつる家の風　同

名乗うれしき幣園をとる　笠

さ月待加茂の祭れるかゝん　同

瘡落ちと拂ひてゆく　角

かつらを軍の神か花折る　同

塔哉はのへん大宮司か畑　笠

曾久美那之九梨

不拓乃部

十月十一日餞別會

旅人と我名よばれん初霽　芭蕉

亦さゞんくわを宿〳〵にして　由之

鶺鴒の心ほと世のいそがしき　其角

粮を分よる山陰の鶴　枳風

かけありく芝生る露の浅緑　文鱗

新舞臺月にまいるや　仙化

中の秋畫工一流きかつるなり　魚兒

鱸てうし歩かくる漢舟　観水

神垣や次第にひくき波のひま　全峰

齢と縁しまし君が妻　嵐雪

酒のみにさゝとめ連乃並ならで　執筆

卯月の雪を撫る法くはし　翁

鱓つる袖つくはらす敗川　由之

蘿一面にのこる橋杭　其角

道志らぬ里に旅をかりにけり　枳風

月にや啼ん泊瀬の篭人　文鱗

葛篭とく匂ひも都なつかしく　仙化

おもむくまゝを訊ぬ傀儡　全峰

途中にとゞまる来ぬ翁を巻て　翁

沖へく舟呼めくらせし声も譄　由之
花ゆへに名乃付ケし峰を咲つくしき　嵐雪
別るゝ雁をとゝむす琴の手　擧白
卯の字書キしうき世の外に入　鈍水
萱乃ぬけめの雪を焼家　仙化
老の身乃縄あるに猿にかゝりける　由之
妻流されし跡乃関守　翁
明暮は手潟（ヒガタ）の松をかぞへ侍く　挙白
命成ける船乎遣（ハウ）蟹（カニ）　キ角
艶出てゝあまた傾りん法のたつき　嵐雪
志つゝなゐ御寺成都むるぬ　鈍水



蘚や花ふむ坂路白いかしほまき　全峰
小畑さかしき葉山に住しゝん　杉風
艸の戸あけたる酒債（サケニ）にわさくら飛　翁
つきゝれ星を妹におしやる　挙白
薫（タキモノ）乃志める面白さ夕ぐれみ　仙化
幟（ノボリ）のさしてゝ氏の天王　其角
御牧野の笛吹すみ轡（クツバミ）声　全峰
僧くるりしく腰をさばき杖　杉風
見んく跡しと文字の子昂ヲ嘲（アザケリ）て　其角
堺の錦蜀をあらしへる　嵐雪
佗蛬や寄（ガウナ）虫の皮に交りあらん　鈍水

筏手に出て歩苔すゝむ哉　翁

谷深き日うつりハむの木目乃こ　挙白

静さは水に雨春乃山る　由之

芭蕉庵主回郷

時乃冬芳野をこそ見し旅衣つと　露沾

烏巾を送る

まろこし此よしの奥乃頭巾哉　素堂

面白の中杉瘦(ヤセ)ぬべし冬老菊　不卜

木かくしの旅うしろすゝき哉　嵐雪

鳴千鳥富士を見かへれ塩見坂　杉風

咄しもや大井の流佐夜の霧　蚊足



捨まても仕してふまんうねの霧　仙化

旅寐さう紙小ニつハ旅うちし　枳風

絵無筆紙小やおもき霧乃松　李下

筆下のすき花をのく句あり

ぬきんあらる送りやさん時雨哉　文鱗

時雨くに謡かりつ垂ん艸乃庵　挙白

箱根山志ぐれなき日ぞひとり　由之

蒲団(フトン)借ス女もあらし旅ね宿　露荷

萩枯ぬむつの紙循こやこまで　治蓬

宿をとれ宵清る間も鉢葉めせ　如泥

冬の日紙志てつらくほまれ哉　渓石

冬されを君か首途(カドデ)や花の雲　其角

詩歌文章をあらし侍る

志くれつゝ雪にかまてる入日哉　杉風

眠(ネムリ)て来る船鈴まもてなす時雨哉　沾蓬

雪よりも先ふこほるしくれ哉　十来

めくさけん山にかゝらぬ時雨哉　蚊足

蜘(クモ)のゐ乃破まよと傳る枯葉哉　冬市

蝉のからつもる落葉木葉かな　為睦

ぱら〳〵乃木葉集は山路乃船　枳風

牛泥み蹄代くは木葉乃船　好柳

深川夜泊

木からしや夜の木魚に吹さえぬ　李下

櫓(ロ)下し木からしいさん乃船　巴風

冬枯乃人見よあまる瓢(ヒサゴ)の船　同

松苗を枯野が中見川乱ふ　枳風

萱屋の侭あけ放り冬木立　琴風

こゝ移しる僧とかゝらん窓の木立　卜千

甲斐山中にさまよひ
ける夜宿かりぬへき
かさもなくて

刀さしてあやしき雲乃地蔵かな　破笠

初雪や衾(フスマ)にこもる鐘の声　野馬

雪ふりて世をさみし寒さ哉　永中

古寺は霜ふりいまぬ撞ケ鐘　吼雲

芭蕉いろまま根無に霜の花盛　素堂

對容

我庵の霜まくろ見し月乃遙　好柳

和好柳子

人まとん冬はたしねも夕涼ミ　其角

をそのゝ酒債をのこし鰒賣　好柳

塩風に羽々く鳶乃松ちるく　由之

夜坐一句

何と乱く冬の夜障子をさられけり　其角

うれミ火に芋やく人ハ薫モンス　同



ほねのうつミ火おもす洞ヶ峠　紋水

門ほしく世間ハ寒しむつかしし　蚊足

炭をるむ音さへ氷る寐耳哉　嵐蘭

灯の影まで凍る火燵哉　魚兒

燵を譲る命つきめし榾の蟻　似竹

炭竈とまつく経よむ法師哉　不吹

茶れもすす炭やく家代見よらん　巴風

寒蠅

憎まれてながらふる人冬の蠅　其角

法華を守りて

法を見よまく釈もあまらぬ火燵哉　嵐雪

鋑をさや門通る子もみられけり　景道

宿僧房

あさまし閼伽の水まて冬菜哉　其角

駒形に誰か身ありしや寒念仏　三園

川風やわさし乗給寒念仏　湖水

暁のつくはまみゆるや寒念仏　其角

星斗にうつ五位一声あさき哉　湖春

夜流に浮桶つかるちとり哉　冬柏

水鳥乃鈴目離されるかけり哉　由之

あの男袋に寐るか夕ちとり　山夕

鈴ふる如鷹に晴たる尾上哉　冬市



十二月九日ちつ雪降のよろこび

初雪や幸と庵に罷有　芭蕉

翁友人

君火をたけよき物見せん雪まるけ　同

山家の夕雪

雪に折るゝ枕ゆく音か小松原　露沾

猿川や市に眺めん雪くもり　沾荷

窓明き間半雪ふる夕かな　魚児

黄昏もまつ見る雪芽折る音　孤屋

友静亭にて物くふて

比良の雪赤鯔よりも詠めけり　自悦

ちれハ小野へもゆかで雪を見る　文鱗

もり鳥麻許尺さし雪のくれ　濁子

うす雪や破風からいる煙かな　自棄

初雪や月をえかる艶竹哉　由之

露沾公にまゐらせて初雪

ちる雪を盆にもりたき詠哉　其角

君が朝雪みんとてもとく

日はさく鼓そ雪をあしたかな　露沾

凍不川よ炉にほへる炭　露荷

給絹張簾の竹をとこのくさ

披居ノ　其角



二まきとけさハまるらん道者か雪　沾徳

ぐわらくとゆきさ雪のこぼれ　安重

辛崎よぬるる雪の詠かな　観水

きるいしや汐の干潟を石乃雪　蚊足

雪みなや鮭先ツ雪氏の袖　魚児

慶運が髑髏や雪の芦　紋水

衣あらしや衣擣き拂ふ雪の宿　孤舟

初雪や風呂によらでタかな　仙化

白川や関もる雪あるる雪のくれ　東順

草菴

門乃雪掻あるやと訪来けり　其角

雪見日や家々日比の道ちらし　全峰

波のうへに雪あり蜆とる人々　枳風

門のかね傘さしてみるわれ哉　斧鉞

雪深し村<sup></sup>ウ白くみえぬ梅　鈎雪

梅かれは笠もかりしや雪霙　コ齋

鎌倉の僧もふりんその梅　露沾

漫成五倫

君臣有義

家のうちにあるりえ成忘るれともすれ　其角

父子有親

鰹けや憎まさよ絶ぬふき物之



夫婦有別

拵ふさめれとおぬる歎れす

長幼有序

朋友有信

襟若ハ娘のうたにもくらみ乱れ

君ひと我嫁すまを返スあらなし

永家乱し忘れせんさべられし　沾荷

節分

豆とりく我もん若鬼うらん　野馬

市に入てまし世わ師を哉　素堂

よ紀草を挑ずさ角さまさ志すす哉　魚児

雄平彩かむ月のしらすゝれ　紋水

室乃津に足袋さす女師走哉　如泥

子を祝ば

羽子板にちまきを彩み師走哉　露沾

歌をよむ身は極りとさきを重ね　文鱗

淋しさを舩にあつるとしの暮　枳風

とりあやつり川まき流れ年こさん　孤屋

年の夜や人に手足の十ばかり　去来

いよいよ

善根く大晦日麻酒こつれ　甑北

しいて見あふ市の笑や年の暮　挙白



関

年の一夜王子の狐見にゆかん　素堂

晦日〳〵や市会れ入て大晦日　蚊足

月雪とのさばりけらし年の暮　芭蕉

年〻の梅

手紙もさいゝ川なかるゝ年の暮　其角

貞享丁卯歳霜月仲三日

蘇乃露

みつのとせとり仲秋乃月此月をさまおもい
さよひとゆびおりて此夜ハ深川の芭蕉
庵にかくれたるを世安つれん一夜ハ露治ひ
老茅花むらく比のりを世なる年し窓ニ
虫のしみめ清月とを世ありし也さ来山むて嵐二の
袖ニいさそはまつく　船河　野山さかくやく
て幾ちる古人の残りさし涼しんのもとを隣る
句に集てにめいほくをはつちしぬ哀にし
てそ此いひある秋の初めより老父いとく悩
つよくなりし比野る事く毎とりなし一家命

何の拘もひかりみなひとり存せりて第一
ぞてもせんくはくなくさめし醫術薬力ともなり
つきはし神ぶまてるくこれもむ人ぞしそすれど
此世とおもしてまを風さる四露のしてさいなく
とれ閻魔王善逝へいのきやりける玄旨阿の世へい
てくれけり

二蒔の蟲もあくり恩と云まりぶ　其角

といふ句をいてて字をぬし添好愈此中年
ちらつく同さ夢し字みとし感見ける此日ちり不
可思議の感應ありて一滴のくれりをうけ
ねらふ志をしもりてる守られおぼえんけるいきて



これ今年ごと十二ツなる胸膈よりひるひてねぐく
て其名下ともに三丈の身を枕上まてしめ
かの葉を薦く人宮に出ッといひし詩式をかり
けるきざみの雪に吼ゑん一声ともなら語りむひ
の夢ら添おもひぬおさいまうとりかろりてな
くさ業添才ある物の衰えぬしたれとてぞ作法
する行四季まつりしてちよ世えんうはなきなる
もせけるりみとせるてく此状おほら老のて
ちら紙なし毛ふくむおみ皆しめてしさく
みの気休らしてきる添らのいひもはららかと
くしく来めるそ世のあちれまい訓つらんと定き

しうおかしかりし身の物うき旅はさし(?)
めとて看病せしも枕のちりを払ふ御の(?)
ことなきかに介抱の手もなく人をきらひてさしもなく(?)
むる名残こそあはれなりけれ常住えけり病(?)
父待期の比は念仏をとなへて貴賤ともに欲を(?)
後の世の法をもひたすら我身のかなしき所を(?)
厭離せよと皆ひ切なる事と受持法事(?)
乃正眼寂然たり(?)

其夜(?)

宿や秋好色をあくまで七多羅樹(?)　其角

海ても…かうして寒くなりにけり(?)　去来(?)



く病身ぬるくてとくのくちくはし夢のかなしも(?)
んとちかきとするむる筆の数々十七十三ケ条の(?)
花鬘みゆる何の業をかるのまんすし拄子義(?)
ぐまとむる祈をも求めけり(?)

死施みなる草の露の檀も返(?)　東順

かくいさく死よ我ゆるめなれも死生み命(?)
納る所病し三界十金の踏こころ十一橋を(?)
まくて後再て自見しそよりしむ本さを(?)
みるも持父のそめうり鳴かせて親分法帯の(?)
夜をさすまる第酬の句く苦のへる印無しを(?)
ぬけまるもかるけに老木をかすへてるつ…(?)

秋の空を顧さはりまで廿七と廿さまざまの撰者
條の露ときこえしも阿しのまゝ侍りしおもてに
なくさめこの月しもなかりし　其角
信濃にも葉り子ありなりの月
とかく半つけて病床をうかがひ侍る中
なし　東順
子と姨と身のかくて見ん中秋の月
く満なき月のかゝみなる子ども葉ん
百里みり雑を農み十里よ
二途(なた)の道いつまされも又病く
毒く遊ちり折かをみく家れ燕寸



夕月八十歩に残を擲(キリ)て葉
殺(ガ)色洞織もなよ秋の雲
離溝の色舟を萱の軒に立て
なれてみやこの空に隔る幡幢
都の客井石に躁ゆし河原布
恩菜を友のみす深夜の水
庭燈(ズキ)の影夜のはつ守くするる
大みし顆(ガイ)まさく格退究
枕の助足をおろして境尤郭
膝を見るとの浄瑠璃の本
急次り倚(カタヨ)るかるゝ魂をゆり直し

其角　仙化　嵐雪　神叔　介我　枳風　桃鄰　幸隣　鉄松　芝莚　素イ

降らすきし雲ら通る白雨　平砂

手の扇を間ゝ人ぞ付し入れ堂　可聞

茶さしさいてくらし思ひける　萬巻

门立の客世もなる盃乃十二日　東湖

つかけるかり烟の峰　其角

譚潭の魏乃うちハ業かくれて　神叔

小倉提を咲きゆく月　桃隣

温飩濃濯胝従乃祖なる楽　仙化

お気かとり指ツ文の猩ひ　介我

髪沖りめ虫歯をつけ花墨　萬巻

常る典く摘ぎるひあなる　素イ



江ぬめ乃起四方家数乃花盛り　平砂

雪てかくまし寓士ハ探幽　其角

焼の紙を来書せる候白杜丹　介我

金を貴ふる通る寒井戸　仙化

見渡せてうちならや對る沖　桃隣

紅纏掛てゝ中居をとらむ　神叔

大酒を被ひし叔ふ未練う見　介我

鼻息りもちる宮焼の灰　万巻

子松の手拭ひかり貫かう　神叔

おちし貽ありすりか詠貌　素イ

いつ人も奈子け白ひ抑寿てん　其角

涉し河あら浅き蓮(ハス) 介我

桟梁の樋をかくしてお紅日記 平砂

料理をさし仰人白菜宿始 仙化

家まてそ熟しん作なすいまそれとも 桃隣

画し打鼓の辛(カラキ)肉桂 萬巻

まそい夢座敷まくゆる竹拭 其角

生人のおを砂め忘人 平砂

雁あらは素を紙なる勢(ヘホヒ) 素イ

気比の松りめ三日の屯 桃隣

攫(カタミ)の下に明るし本名はじ 仙化

特尊無笑を射積なりけり 神叔



夢の渦まく忘れ所 和宮ここ母 平砂

只俳名を盲禅つ 其角

面すてるを概を作る世の鏡(カガミ) 介我

湊を忘れて湊士の墓(サカモリ) 素イ

洞志の巌(イワヤ)は流く月花雪 萬巻

玄文の跡を此荻の露 仙化

病気に依りて

四吟

蘇乃井の猫繕ふ醤油樽 仙化

三年月すら荻垣の虫 介我

月露手細(ヒモ)笑かけつ笠残く 其角

まなひとり川を酒にまかする
やるとらふ撥をと欲すれまへ
夕日にかゝる竜のてらうそ
買升を袖にさしうるきは風
かろき忘八の折檻をうける
傾戸と始き火にゆらめかしく代
帷を携る帯は仕付ひ
咲きんハしゝめきつと隅田川
筏に魚馬を鳥帰あり
扎壷の宿けに茶ふ床の上
鉢扣さく用心乃連

鉦ならて大振袖乃伊勢参り
ゆくハなまめく人やりける
揺うそてすそめハ醉ても花の信
ものにめる月や縮緬にあ画
鰐口の青羽の滝ます宗旦
白鷺と汲る多くの鳶の山
門もは截りくさき八年なかく
麻うらひ年と母子を母は待き
貧のあまりが風といわれけり
醒る日なくてもうと於ふ
六月の黒さきと拝ふ能衣裳

神叔 我 化 叔 角 化 我 角 叔 化 我

角 叔 我 化 角 叔 化 我 角 叔 我

いつれの代よりか荒る寺　化
下部おりなつかしさ据ゑて　叔
あはれし人も指(ユビ)をも噛(カヒ)切　角
うしかしぬ新三絃に弾る月　化
冬菜植よつかれ菜の末　我
秋ふかし高鉾を下る殿(ゲタ)の音　叔
嵐秋ぐもの鳥をとらかるゝ　角
檣の大北出んか何く流れけり　我
後先(アトサキ)おや呼バル八ツ立の船　化
蟬花を目明地(キ)のかり鏡入りけ　叔
さむの繪打や庵出ん花の葉　角



八月十日
かさまきく　三吟

蕣や詮(セン)なき庵の中にあるも　神叔
處に菌(キノコ)の生は候の錦　其角
反(ソリ)くる川魚(ゴ)ハ餌(エ)番(フダ)を離(カリ)れて　介我
帆出ん見れも背(セナカ)照る月　叔
殿あしく田舎ご雇ぬと見てゐる　角
雨よるに下部(ヲロ)の店の半蔀　我
何年の豊にするは石の塔　叔
埋(ムモ)れ井よりも古し蚊柱　角
丈(ツヽ)なくて生年(ヤ)ハと上の男紋　我

海士乃ほれて思けしよ人
悪からぬかよひ路也遠ひ拙
経の達者ハみれ法華宗
組手むらひ合ふ体料理方
此海もかり芝海老を取
小縄をもおりはる船や凪の流
串挿し買ふて村乃紫肉
肉蕎麦ハ濃麺もとむる花の外
雛客をいとよふ女織立
薫らんし世の風俗也たりお
糠を揉ふる大きやせてり

叔角我叔角我叔角我叔角



涼しさハ柳樽の水ま半溜て
市乃世のかたく善情
曝とも長食く又や中々何の齒
新子しもかく変猿を憫
蠣とと伝所を足せる喜ぶ
雪汁月潰くて呈残る月
西前のかさいすらや華袴
俵乃外おもくのほとの大船
旅人先ツ蛇乃事こ角乃り出
其の声とて遠く罟乃入し鳥
般若経千部をまなむ麦畑

我叔角我叔角我叔角我叔

いづすまて粉ゟ新しく書まで
此段でもの紙壁付つゆ
日がくれて大津をもる稲荷の月
を過一もいそうて寛(?)さ庇
花の陰嵯峨(?)の庵をうる小町て
嬉(?)をこの乃むまれ墳(?)涙
皮作(?)妓屋を家をして絶ひ月
武者絵乃屏風人を負る
蟷螂の心をもちむと上手なる
猿おとて独り蜘蛛乃糸
十たびのかう古さき卿は化性まし



丈角牛屋角丈屋牛丈角牛

伏見よ似た深草の宮涙
採衣乃霜の中より虹立て
は紅をそめ石佛乃教
癌(?)の悲涙古保(?)かく穴をよる乃
孝なる娘と人の志付たる
皆哥と四季の因業の補の月
秋は名針(?)の衣乃扶実
焼香へいつの末なりうるし飴
隆(?)着より貴ぶる海屋ともしま
をふれつゝ抱もとへたて大成く
江戸乃なるんは相得るも地

屋角丈屋牛丈角牛屋角丈

桐の葉ハいくさうつしぬる秋田織　　屋

蚯蚓の鳴声ハ行燈の裏　　牛

良夜吟　引付

夜ふけてく名月あつまりけり　　芭蕉

名月や俗と拙く橋の上　　岩翁

さ沼す小月見の音ぞ静く　　遠水

かるしや声もさなみの舟の船　　亀翁

惜ッ哥ヲ痛ム文ヲ　　彫棠

文ヲ閉など閉りぬ中にちりしの庭　　沾圃

月落てこよひの名残る莧(スベリヒユ)料　　松吟

笑ふ月見ちよる人や松の透(スキ)



月みつゝ和泉式部もうらみがほ　　秋色

小藤のつゆのいさをもむつましく
おもしろいことよういひし人の
むかしすがたをしのびちらして

秋の蝶や[illegible]花の伽　　全

名ゝや縫(ホコロビ)めし下女の[illegible]　　探泉

曲舞ぞ五十已上の月見せん　　堤亭

名月や樵も伐ど気色かな　　拙侯

城楼の影もむかしの此月　　山蜂

こよひ粒月ハ満(マン)蒐乃女見ん　　子珊

あゝもすれば袖にせむ月見かな　　需笑

名月や童をつれて夜半迄　　一習

名月やとらふりも醉へて帰りぬる　至曉

みる月といふべきものをけふの月　青山

近よりて往来はなりけりそ

往来わめ宿の月見や五ツ過　巨山

名月や栗鼠(リス)の尾さらく葡萄(ブドウ)棚　可明

月のけふ年待ほうの茶酒　桂花

旅人も陪ちのの持る月見かな　酉花

名月や男すがたの浪座敷　吼雲

名月や畠村中青ざみ　白之

名月や一明見つくる酒の味　是吉

老侮も月の宴や人のさ諸　水谷



酒樽とこぼさで捧を月の使　節水

雅年寄ぬ油売ほの村月見かな　和水

来る見格子の隣やきの柱　林也

名月に喰ひ伸る一座の杯　雨夕

湖と石船かりてつかみけり　夏林

名月や師と語る昔の昔節(フシ)　鹿山

名月や西所なきよ枕宮　池石

名月や高うくいと口押しよ　楓橋

栄屋の八橋年水まれ月見かな　冬鴬

名月に浮るもすくめぬ数らな　鉄松

名月年繋ぎ(アゲ)葉(ハザ)な女登座かな　正春

冬の月聖(ヒジリ)も病をよむなめくし　残鳥

名ころや尾上の花に越るほと　千崎

名月や蝉もひけり水の上　嵐雪

名ころや蛍火千行を没(モツ)かる　仙化

風雅あるも京乃月見誰とされ　枳風

髪結ふ人庵なありし常ふのまこ　万巻

名月や雪みんとまめ乃庭の松　桃鄰

新月や斧研けらしまし蜀の賂　素々

名ころんを余りし下(クリ)れもはぶこる山　東湖

水鳥月見いつくの人通り　可聞

名ころとれもちしおまし猫のかす落し　芝莚



名月や帰るせ瀬(セ)のしてあるせ　平砂

名ころや後生れ瓶も赤やあると　幸隣

名月やうさ俗扇の背もちう　うか舟

水くさの露をはらひをさ経た入年
こまして見しくれ形えまかりゐ

七十乃毒守のるし くふえ月　神叔

万葉集千　代のさまくしこきもつる
みえのひとりとしろ千

名ころや蟋(ウヅ)わくやう小船つとひ　介我

蓮(タガ)ゆひれてう海つうつやふれこ　固丈

蛤をもして剥(ハゲ)るうぶの月　利牛

名ころや隠者の門こ魚の腸(ワタ)　孤屋

跋

其角七部集といつる冊子
ありけり句に玉を流しぬ
海の連句は風ひきけり
縦横自在にして晋子孔
いふる如く我志を伝へけれハ
俳諧の素をあらはすのみ

蕣乃露終

撃就考あしきまと大実則て
集中の趣き二三度ゑ略しの
あまりて書信千里の筆紙にて、
義を拾ふきるのみ
天明戊申春 某叟

昭和36.8.14 受入

皇都書林
御池通堺町御所八幡町
竹簡堂利助